
感情欠落者

松本 和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

感情欠落者

【Zコード】

N7656A

【作者名】

松本 和

【あらすじ】

感情欠落者。彼女はそう呼ばれている。みんなから避けられ続ける彼女は、ある日母の勧めで写真展に行くことになった。

第1話・感情欠落

「どうしてあなたってそうなの？… 気味が悪いわ。」実の母が吐き捨てるように私に言った。

そんなの、私が知るわけがない。なんでもわからぬ。ただ…ただ何にも感じないだけなのに。

私は感情欠落者だ。… 親や同じクラスの人、近所の人私が私をそう呼ぶんだ。

「うわあー。可哀想。誰か拾つてあげないのかな？」道端に捨てられた花を見て、そう言つた女の子がいた。

私は道端にいる犬に目を向けた。何も感じなかつた。

「綺麗な花だな。誰が持つて来てくれたんだ？」教卓に飾られていた花を見て、担任の先生がみんなに聞いた。

教卓に飾つてある花をじつと見つめてみた。何も感じなかつた。

「何言つてんだ、お前！？ ははッマジウケル。」クラスメイトが腹を抑えて笑つていた。

わたしはそれまでの過程を聞いていた。何も感じなかつた。

何が可哀想なの？何が綺麗なの？何が面白いの？なんで哀れんでいるの？なんで感動しているの？なんで笑つているの？

… なんで私つてこうなの？ そう思つても、私の頬を涙が濡らすことも。みんなに申し訳なく思うこともなかつた。

学校で自ら私に話しかけてくる人はいなかつた。… いや。… 一人いた。一ヶ月前から彼は学校に来ていない。

彼は唯一私に話しかけてきた、変な男の子だ。私の記憶の中に彼はしつかり存在している。

でも、彼が学校に来なくなつたからといって、私は何も感じなかつた。

「私」にとつて彼はそれだけの存在なのだ。

ある日母が私に言つた。「あなた、本当に感情がないの？なあーんにも感じないの？」

私は頷いた。「これに行ってみなさい。なにか変わるかもよ。」「変わらわけがない」と思つたので、受け取らなかつた。「絶対に行きなさい。」母は無理やり私の手の中になじ込んだ。

一週間後私は写真展に行つた。母は行けど促したものの、連れて行こうとはしなかつた。

電車に乗り、駅から10分歩いた。写真展は結構大きな会場で催されていて。

もつたひないと思いながらも入場料を払つて入場した。まだ母の勝手な態度に怒りを感じていた。

…と言つても、私の怒りは「どうして？」つまりだつた。

入つてすぐのところに一枚目の写真が飾つてあつた。題名は「母」だつた。台所で皿洗いをしている姿だ。

じつくりと見てみても、何も感じなかつた。母への怒りも消えなかつた。

二枚目は「桜」という題名で、その題の通り満開の桜が写つていた。普通の人はここで足を止めて綺麗だと見惚れるのだろうか。…とてもじゃないが、私にそんな気は起きな

かつた。

その後三枚、四枚、五枚…と足を止めることなく突き進んだ。
この会場には一百枚近くの写真が飾られるらしいが、そのすべてを見
て回るのかと思うと気が滅入ってしまった。

何の感情も抱くことなくかなりの時間が過ぎていった。もう帰ら
かと思い、今まで進んできた道を戻ろうとしたとき。
私の目はひとつの写真に釘付けになった。

第1話・感情欠落（後書き）

内容がまとまつていっていないですよね。
よくわからない小説になりそうですね。

第2話・安藤 清太

空の写真だった。青い空がどこまでも広がっていた。あまりにも白い雲が、行く当てもなく佇んでいた。いつも見ている空がそこにはあった。

私が腕を広げても足りないくらいの大きな写真で、何もかも包み込んでくれる優しさがあった。

「綺麗だな。」私は息をするように、自然とそうつぶやいていた。

私は今までこんなに綺麗な空に気づかなかつたのか。… そつか。これがみんなの言つていた綺麗か。なんで私はこれに気がつかなかつたんだらう。なんで。

悔しくて、切なくて、涙を流してしまつていた。

ひとり写真の前で涙を流している私は通行人にどのよつな印象を与えたのだろうか。

少なくとも、感情欠落者とは思われないだらう。

溢れ出す涙を堪えながら、私は名前を探した。この写真を撮つた人の名前だ。

「安藤 清太さん」私は声にだして呟いた。私は安藤さんの他の写真を求めて奥のほうへ足を進めた。

しかし、最後の一枚まで見ても安藤さんの他の作品はなかつた。かわりに売店で安藤さんの写真集を見つけた。

その日、私はあまりお金を持っていなかつたが、安藤さんの写真集を買つ「にした。

帰りの電車の中で私はその写真集を開き中を覗いた。

そこには先ほど見たような様々な空の写真があった。飾られていた

写真もあった。

今までにないほど私はその写真集を大切に思った。

それからといふ私の頭の中は安藤さんのことでいっぱいだった。どんな人なのかな。

他にどんな写真を撮っているのかな。何歳なのかな。知りたいことは無数にあった。

色々な写真展にいっては安藤さんの写真を追い求めた。

そんな私の変化に周りの人もじょじょに気づきはじめていた。

もう私は感情欠落者と呼ばれなくなっていたんだ。

空を見れば、綺麗だと思つて見惚れるし。それと同じように花や物も綺麗だと思つた。

以前よりよく話し、よく笑つようになった。すべては安藤さんのおかげだった。

会いたいな。そう強く思つよつになつた。

そんな毎日の中で私の生活にある変化が起きた。

私が感情欠落者だったころに、私を気味悪がることもなく話しかけてきた男の子が突然学校にきはじめたのだ。

彼が学校に来なくなつてから一ヶ月以上もたつた日のことだった。

「久しぶり。」一ヶ月も会つていなかつたとは思わせない声のかけ方だった。

「久しぶり。一ヶ月も何してたの？」安藤さんの影響ですっかり普通の女の子っぽくなりつつあつた私は彼に尋ねた。

その時の彼の顔といつたら忘れようがない。まるで別人を見るよう

に私を見ていた。

なんにも知らない彼が驚くのも無理はない。私はすぐ変わったのだから。

「……えっと。……働いてたんだ。」やっとのことでそれだけ答えると彼は教室の自分の席に帰つていった。

彼が何をして働いていたのか、そんなに興味はなかつたけれど、また学校に来たんだから何かあつたのかな？
といつ程度には疑問に思つていた。

第3話・写真展

その日家に帰つてから、インターネットで安藤さんを検索した。情報をえることは出来たけれど、安藤さんの顔写真や安藤さん本人のコメントが載つているホームページはなかつた。

掲示板での書き込みでも安藤さんを見たという人はいなかつた。

どんな人かな？背が高そう。眼鏡とかかけてるかもな…。空の「写真」が多いしきつと空が好きなんだろうな。

私の中で安藤さんの想像が広がるばかりだつた。

学校の昼休みに、今度はいつ写真展に行こうかな？と考えていた時に、

「ねえーねえー。」

と、最近仲が良くなつた沙恵が話し掛けてきた。

彼女も「写真を見るのが好きらしく、たまたまこの前ね写真展で会つてからよく話をするようになった。

「何？」

と答えると、今度写真展に一緒に行かないかと誘われた。

今まではずつと一人で行つていたし、時には一人もいいかな。と思つたから、

「いいよ。」と答えた。

沙恵は来週ある写真展に行きたいと言つた。

それは安藤さんも参加しているものだつた。

それからしばらく沙恵とその写真展の話をした。

沙恵は可愛くて素直ないい子だ。趣味もわざと合つので、いい友達になれると思う。

その日の帰り私の頭の中は早くも写真展のことについてぱいだつた。

「あ～んざ～いさんツ！」

背後から突進しながらの呼び掛けだつた！顔をみなくともわかる。絶対にあいつだ！

「もあ～。やめてよ～！びっくりするじゃん！」

私が怒つてみても当の本人はおかまいなしだった。

「斎藤君…聞いてる？」

「もちろん聞いてるよ～！」

ならなんで毎回突進するんだあ～……たくさん感じるよひになつて黙つている」との大変さをしつた。

「一緒に帰ろお」

斎藤君は無邪気に笑いながら言つた。私はきつと昔から彼のこの笑顔に弱かつたんだろうな。いつも断り切れない。

帰り道を会話もなく一人で歩いた。なんか話すことないかな？？い加減この空気は辛いよ。

「昼休み…沙恵ちゃんと何の話してたの？」

「んー？写真展の話」

「なんで？」

「なんでつて……今度一人で見に行くからさあ～！」

「も…に…たい…」

はあ？今なんとおしゃつたのだ？

「聞こえなかつた？俺も一緒に行きたい！……だめかな？」
「だめかな？つて……そんなふつに言われたら断れないつて……！」

「ああ～。さ、沙恵に聞いてからね。」

「うん。……わかつた。」

それだけ言つとまた黙り込んでしまつた。

一体なぜ彼は一緒に行きたいなどと言つたんだ？

そういうえば、わつき沙恵の話から入つたなあ。沙恵はクラスでもかなりもてるし……もしかして斎藤君もそつなのかも。

きつとそつだ。じゃないといきなり行きたいなんて言わないはずだ
もんね……。

そおなんだ……斎藤君つて沙恵が好きなんだ。

つて別にいいよね。斎藤君のこと好きつてわけでもないんだし……。

第3話・写真展（後書き）

私はかなり長編向いてないです！途中で嫌になっちゃいますね。でも最後まで書きます！！

第4話・写真展へ

それから沙恵に許可をとつて、写真展には3人で行くことになった。斎藤君もそこまで「写真に興味があるようでもなくて、本当に一緒に行きたいだけのようだった。

写真展に行く当日。久しぶりに安藤さんの「写真」……しかもきっと新作。が見れるということで、正直私はうかれていた。

斎藤君と駅で待ち合わせて沙恵の待つ5駅先まで行く間、斎藤君とあまり話をしなかった。

普段しつこく話しかけてくる斎藤君は、今日はなぜか信じられないくらい静かだった。

5駅目で沙恵がくるのを待っていたが、電車が駅を出てからじばらくたつても沙恵は私たちのところにこなかった。

心配になつた私と斎藤君は沙恵に電話をすることにした。呼び出してかなりたつたとき、やつと沙恵が電話に出た。

「うめへん……今の電話で起きたあー」「悪哉れもなくいわれたものだからつい黙つてしまつた。

「私はもう間に合わないから……斎藤と2人で行つてきなよー」沙恵はそれだけ言つと、もう一度謝つてすぐに電話を切つてしまつた
!!

沙恵は悪い子じゃないつてわかつてゐるけど、この時ばかりは攻めず

にはいられなかつた。

つてことは……つまり……斎藤君と2人きりで写真展に行かなきや
いけないんでしょ？？

そんなの気まずいじゃん！

「沙恵…今起きたみたいで、今日はこれないつて。」

斎藤君に事情を説明すると

「ああ～。そおなの。」ときわめて興味なさげな答えが返ってきた！

それでいいの？斎藤君は沙恵と写真展に行きたかったんじゃないの
？？

なんか最近この2人に振り回されてばっかりで嫌になっちゃうよ。

私は大きくため息をついてから、

「次の駅だね。」と一言つぶやいて窓の外の空を見上げた。

彼の写真は今口も空の写真なのだろうか……そんなことを考えなが
ら。

彼の写真の前に立つと、すべてを許されたかのような錯覚に陥る。空の青さが綺麗で、私の汚い部分をすべて洗い流してくれる。

彼の新しい写真もそんな空だった。名前を見なくともすぐに安藤さんがとつた写真だとわかる。

不覚にも、斎藤君がいる前で泣いてしまった。写真を見ただけで泣くなんて大げさ！？そんなわけない。安藤さんの写真は私を変えてくれたのだから。

泣いている私の横で斎藤君が静かに話しかけた。

「空を撮るのにはわけがある。…空は綺麗だ。人間は空を愛し、決して汚してはいけない。僕はただそれを伝えたいだけなんだ。」

何度も読んだ。安藤さんの写真集の一一番最後に乗っている言葉だった。

なんで斎藤君はそれを覚えているんだろう。ファンなのだろうか。疑問に思つて、斎藤君の方を見ると田が合つた。

優しく微笑んで続けた。

「でも、最近は別の理由もできたんだ。ある日自分の写真も展示されていた写真展に言つたんだ。

そこに俺の写真を見て泣いている人がいた。……最初は人違いだと
思つてたんだ。だつて俺が思つてた人は……写真を見て泣くような
人じやなかつたから。

でも、よく見るとやつぱりその人だつた。……うれしかつたよ。写真
を見て泣いてくれる人なんて初めてだつたんだから。

それからはずつとその人のために写真を撮つたんだ。……これを見て
また感動してくれるだろうか。つてね。
2カ月。そんな写真を撮るためにどこにだつていつたんだ。
そして今日。俺の写真を見て、泣いてくれたね。」

安藤さんの写真は私のすべてだつた。だつて彼の写真があるから今
の私がいるんだ。

斎藤君が写真家だつたなんて知らなかつた。私のことを気に掛けて
くれていたなんて知らなかつた。

「俺……いままでは空しか撮つたことないんだけど、次は人物を撮り
たいんだ。

どうかな。美空。」

そう。私の名前は美空。

美しい空。だからより彼の写真にひかれたのかもしれない。

……そんなんの。断れるわけないじやん。

好きだよ。斎藤君も、斎藤君の写真も。
私を救つてくれた人。物。
それらに心から感謝したい。私は変わった。これからはなんだって
感じることができる。

……だけど、今はただ斎藤君への想いだけを感じていたい。

美空（後書き）

全然まとまりがありません。すみません。もしこんな小説でも読んでくれたという方がいらっしゃったら、もう本当に心から感謝です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7656a/>

感情欠落者

2010年10月28日07時56分発行